



ガウラ

42、43編は1、2編と同様にセットとして組まれています。マスキール(瞑想)とされ、詩人はコラの子です。コラとはヤコブの系図によれば、三男レビの次男ケハトの次男イツハルの長男であり、モーセとアロンの従兄弟に当たります。(出エジプト6:14)。コラはモーセ達に反逆し、大地に呑み込まれましたが、子らは助かりました。(民数記26:8)時代が下がり、ダビデ王の玄孫ヨシャファト王がモアブ人、アンモン人らに戦いを挑まれた時、神殿の庭で、会衆の中に立ち、主の助けを求めて、祈りを捧げました。その時、レビ人のケハトの子孫とコラの子孫は立ち上がり、大声を張り上げてイスラエルの神、主を賛美した(歴代下20:19)と、記されています。そして、この戦いに勝利しました。神殿で賛美、奏楽を担当

するレビ族として活躍し、賛歌を捧げたのでしょう。詩人はうなだれ、呻き、魂の叫びをあげています。

潤れた谷に鹿が水を求めるように／神よ、わたしの魂はあなたを求める。神に、命の神に、わたしの魂は渴く。いつ御前に出て／神の御顔を仰ぐことができるのか。… わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす／喜び歌い感謝をささげる声の中を／祭りに集う人の群れと共に進み／神の家に入り、ひれ伏したことを。(42:2)

捕囚の民となった祭司エゼキエルが異教の地で望郷の思いで過ごした姿を彷彿とさせます。イスラエルは「神の御顔」の前に立つ民ですが、「サファイアのような王座に人間のように見える、琥珀金のように輝き、光を放つ」栄光の神の姿を見た告白したのはエゼキエルでした。

詩人は「鹿」のように「水」を求めています。古来、日本では鹿は神の使いと信じられてきました。中国の霊獣「麒麟」も鹿に似た一角獣が原初の姿です。聖書の世界では高い山を駆け回る美しい動物、愛すべき対象に捧げられる言葉でもあります。この息苦しい詩が、清涼さと共に感じられるのは、最初の「鹿」と「谷の水」の言葉のイメージによると思われます。

詩人は乾燥した場所に住んでいて、故郷の谷川、激流、波など思い起こしています。乾いた心にも命の水が流れ、沁み込みますようにと願っています。苦境の身を嘲られ、ののしられ、詩人は思わず、「なぜ、わたしをお忘れになったのか。なぜ、わたしは敵に虐げられ／嘆きつつ歩くのか。」と、嘆きます。なんどもくじけそうになりながら、詩人は心を傾けて祈るところは、「わたしの岩、わたしの砦」である神の御許です。あなたの光とまことを遣わしてください。彼らはわたしを導き／聖なる山、あなたのいますところに／わたしを伴ってくれるでしょう。神の祭壇にわたしは近づき／わたしの神を喜び祝い／琴を奏でて感謝の歌をうたいます。神よ、わたしの神よ。(43:3) 詩人は、神の下へと導いていく「光」と「まこと」を遣わして下さいと求めています。ヨハネ福音書は神から遣わされた一人の人、バプテスマのヨハネが光について証しをするために遣わされたと記しています。その光は、まことのひかりで、世に来てすべての人を照らすのである(ヨハネ1:9)とあり、神から遣わされた「光」と「まこと」がイエス・キリストであると告げます。

両編に なぜうなだれるのか、わたしの魂よ／なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう／「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ というフレーズが3回繰り返されます。どのように苦しくとも、希望を失わないと告白する詩編の言葉は信仰の民の魂の叫びであることを感じざるを得ません。「讚美歌21」には 42、43 編の詩人の嘆き、呻きをそのまま歌う 3 曲の讚美歌があります。131「谷川の水を求めて」は高田三郎(1913-2000)作曲による日本人初の典礼聖歌の美しい答唱です。

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=uhxkocMnhFs> また、43 編 3 節の「光とまことを遣わして下さい」と求める言葉が 9 世紀のラテン語聖歌となり、231「久しく待ちにし」のアドベントの讚美歌となって歌い継がれてきました。参照 <https://www.youtube.com/watch?v=cDFv1ipVvwg&t=63s>